

ピョートル・サヴィツキー「ユーラシア主義」

黒岩 幸子*

本稿は、1925年にベルリンで発行された雑誌「ユーラシア報」に掲載されたP. N. サヴィツキーの論文「ユーラシア主義」の翻訳である。(Савицкий П.Н., Евразийство//Евразийский временник, Берлин, 1925, Кн. 4, С.5-23.) 本論文は、1991-2003年にロシアで発行された雑誌および書籍8点に再録されているが、翻訳にあたっては、ロシア科学アカデミー世界文学研究所の編纂によるユーラシア主義者の論集に収録されたテキストを用いた。(Институт мировой литературы РАН, Русский узел евразийства: Восток в русской мысли, Сборник трудов евразийцев, Москва, 1997, С.76-94.)

サヴィツキーは、同名の論文を他にも書いている。1923年12月の日付けがある「ユーラシア主義」は、本稿の第一章(I)にほぼ重複する。(ЦГАОР. Ф. П.Н. Савицкого 5783. Оп. 1. Ед. хр. 29.) (Евразия: Исторические взгляды русских эмигрантов, Москва, 1992, С. 164-172.) 1926年にパリで発行された冊子「ユーラシア主義」には「体系的叙述の試み」という副題が付けられ、ユーラシア主義の理念が詳細に述べられている。(Евразийство: Опыт систематического изложения. Париж: Евраз. кн. изд-во, 1926. 80 с.) ユーラシア主義者の綱領として刊行されたもので著者の署名はないが、主にサヴィツキーが執筆したとされる。ただし、本稿とは異なる内容である。さらに、1931年にサヴィツキーは、かれのペンネームの一つであるS.ルベンスキーの署名で、フランス語で書いた同名の論文を発表している。(Stepan

Lubenskij, L' Eurasisme//Le Monde slave, 1931, Vol.8. N.1, pp.69-91.) ユーラシア主義の政治、経済綱領およびその科学的論拠を論じたもので、この内容も他の同名の論文とは異なる。

* * * * *

ユーラシア主義は、ロシア革命後の1919-1920年にヨーロッパへ亡命した若いロシア知識人の間で1920年代から30年代に起こった思想潮流、政治運動である。1920年に言語学者のN.S.トルベツコイ(Трубецкой Н.С., 1890-1938)が亡命先のソフィアで、西欧文明の普遍主義、西欧文化中心主義を批判した論文「ヨーロッパと人類」を発表したことに端を発し、これに呼応したサヴィツキー(1895-1968)らが中核となって出版活動などが始まった。1921年から1931年までに、ソフィア、ベルリン、パリ、プラハで7つの論集が出され、そこには哲学、神学、歴史、人文など様々な分野の多彩な知識人が投稿した。かれらはユーラシア主義者と呼ばれるが、その思想は統一されたものではなく、共産主義の否定、ロシア正教の重視、西欧中心主義の否定、ロシア史・ロシア文化史の見直しなどの視点を共有する者たちの緩やかな結びつきであった。社会主義革命という大きな転換で混乱を極めるロシアに、ヨーロッパでもアジアでもない、ユーラシアという特異なアイデンティティーを見出し、専制でも共産主義でもない第三の道を拓こうとする試みでもあった。

1920年代後半になると、ユーラシア主義者たちの間でソビエト政権の容認派と否定派の対立が強まり、トルベツコイを含む否定派の多くが運動から去った。また、1930年代にはユーラシア主義者

* 岩手県立大学共通教育センター 〒020-0193 岩手県滝沢村滝沢字菓子152-52

を新政権内に取り込もうとするソビエト当局の介入もあり、運動は1930年代後半に自然消滅した。ユーラシア主義の活動に関わった知識人の一部は、欧米に拠点を置いて研究活動を続けたが、ソ連に帰国した者の多くは、スターリンの粛清が激化した時代の犠牲者となった。

ウクライナの貴族の家庭に生まれたサヴィツキーは、ペトログラード工業大学で経済地理学を専攻し、1916-17年には在ノルウェー・ロシア大使館に勤務した。革命後の内戦では白軍に加わり、ウランゲリ将軍の内閣で外相を務めたストルーヴェの第一補佐官になった。白軍の敗北後にクリミア、トルコを経てブルガリアの首都ソフィアへ亡命し、そこで後にユーラシア主義の中核をなす知識人たちと交友を結んだ。1921年にプラハに移り、執筆活動や運動の組織化に精力的に取り組む、ユーラシア主義運動の指導的立場を占めるようになる。ユーラシア主義者の7冊の論集はどれもサヴィツキーの監修である。

サヴィツキーは、経済地理学のほかに、歴史、哲学、美術、建築、地政学、国際関係など幅広い学識を有し、母語であるロシア語のほかに英語、ドイツ語、フランス語、チェコ語、ノルウェー語に堪能だった。プラハで家庭を持ち、ユーラシア主義運動の衰退後も、プラハ・ドイツ大学で教鞭をとり、ロシア・ギムナジウムの校長を務めるなど、多岐にわたる研究、教育活動を行った。しかし、第二次世界大戦後にプラハに進駐したソ連軍により逮捕され、モスクワに送られて反ソ活動の罪で労働収容所10年の刑を宣告された。モルドヴァで8年、モスクワ近郊で2年を服役し、スターリン批判が行われた1956年に釈放されてプラハの家族のもとに帰った。しかし、チェコ政府からは冷遇され、かつての職場に戻ることは許されなかった。サヴィツキーが不在の間、ロシア語・チェコ語の通訳で家計を支え、二人の息子を育ててきた妻が病死した翌年の1961年に、収容所の生活を書いた文章を発表したサヴィツキーは、チェコ当局により再び逮捕された。釈放後は、不安定な翻訳の仕事や欧米に亡命した友人たちの援

助により、かろうじて糊口をしのぐ生活だった。

1968年に亡くなるまでの半年間、サヴィツキーは重病を患い、自宅と病院を往復する生活だったが、最後まで僅かな糧を得るための仕事をし、また知的関心を失うことなく、ロシアおよびロシア文化に関する新しい書籍に興味を示し続けた。サヴィツキーの若き日の最初の論文は、ウクライナの石造建築をテーマとしているが、最晩年のかれの関心もまた、古代ロシアの芸術に向かい、ソビエト期に破壊された文化遺産の復旧の動きを知って喜んでいたという。

* * * * *

訳出した「ユーラシア主義」は、原注 i に「海外の友人からの依頼で書かれた」とあるように、外国人のためにユーラシア主義の基本理念をわかり易くまとめて紹介することを意図したものである。その名前の由来に始まり、ユーラシア主義の地理的、歴史的、文化的、宗教的な世界観を示すとともに、革命政権が樹立したロシアに対する立場も表明しており、ユーラシア主義の骨子を知るにふさわしい内容となっている。

I. 「ユーラシア主義」という名称は、地理的名称に文化的、歴史的内容を与えてつくられたものである。ここで使われる「ユーラシア」は、ユーラシア大陸全体を指すのではなく、東ヨーロッパから中央アジア、シベリア、極東にいたるロシア帝国の版図にほぼ重なる地域を意味する。その「ユーラシア」は、地形的、気候的な共通性を持つとともに、南のビザンチン文化、東のステップ遊牧民の文化、そして西欧文化をおよそ千年かけて融合してきた特異な世界である。ロシアではなくユーラシア文化圏と呼ぶに適したこの世界は、のちに「ロシア=ユーラシア」という概念で説明される。

ユーラシア主義者は、その思想的系譜をスラブ主義に見出しながらも、ロシアの独自性はスラブ世界だけでは包摂されないとして、ロシア文化におけるアジア的要素を強調する。ユーラシア主義の活動に加わった歴史家のG.B.ヴェルナツキー

(Вернадский Г.В., 1887-1973) と同じく、サヴィツキーもモンゴル・タタールのロシア支配を肯定的にとらえなおした。モンゴルという世界帝国のシステムに取り込まれたことで、定住農耕民族のロシア人が騎馬民族のダイナミズムを得て、強力な中央集権制度や軍事組織など、ロシアが必要とした国家体制の基礎が形成されたのである。

東方の再評価は、「文化的、歴史的ヨーロッパ中心主義からの断固たる決別」をも意味した。根拠のない西欧文明の優越性、西欧との差異を「未開」「野蛮」とする価値基準、単線的な進化論、西欧が押し付ける普遍主義やオリエンタリズムに対する強硬な異議申し立ては、ユーラシア主義の誕生の時点から中心的テーゼとなった。

Ⅱ. ユーラシア主義者は、西欧文化至上主義の否定にとどまることなく、ロシアに共産主義をもたらした元凶としてヨーロッパを批判する。200年に及ぶ西欧文化の無批判な受容の帰結としてロシアは共産化した。無神論や共産主義の発祥と起源は西欧であり、決してロシア的本質ではなかったとされる。倫理的、宗教的原理を捨てて経済的欲求を迫った近代ヨーロッパの原理は、「戦闘的経済主義」と表現される。これは、1920年代のソビエトで猛威を振るった「戦闘的無神論」をもじったもので、当時は戦闘的無神論の名のもとに宗教弾圧が行われ、多くの教会が破壊された。倫理的、宗教的拘束を解かれた戦闘的経済主義は、唯物論、無神論となってロシアに発現した。

サヴィツキーは、唯物論と無神論を従えた戦闘的経済主義に対する戦いを呼びかける。「ユーラシア主義者は、正教を信仰する人々である」と述べるように、共産主義に対抗する原理として提示されるのはロシア正教である。西方キリスト教会とは異なり、和合や寛容、従順、慈悲という共同体的精神をもつ東方正教会は、いずれ異端や異教も吸収してユーラシア統一の原理になりうると考えられたのである。

Ⅲ. ユーラシア主義は、理念の体系だけでなく、「思考と行動を結合させて」、「行動の一定の方法

論を確立することを目指す」というが、実際にどのような行動を企図しているのかは茫漠としている。宗教的原理に依拠しながら、ロシアの現状を傍観することなく、戦闘的経済主義や無神論と戦う意思が示されるにすぎない。ただし、共産化したロシアを徹底して否定したほかの亡命者たちと異なるのは、ユーラシア主義者が、ソビエト政権確立という事実の容認に進むことを示唆している点である。宗教的価値基準を持つユーラシア主義者にとっては、「右翼と左翼という政治的、社会的解決の問題そのものが解消されている」として、「もっともラジカルで包括的な事実承認へ進むかもしれない」と述べる。1922年に結成されたソ連邦は、1924年にヨーロッパ諸国から相次いで承認され、ソビエト政権はすでに歴史的事実になろうとしていた。これも神の意思として受け入れたうえで、その現実を信仰によって、正教の原理によって変容させることがユーラシア主義者の使命と考えたのであろう。

ユーラシア主義者は、ロシア革命を西欧化の帰結であると当時に、西欧との決別、新しいユーラシア世界誕生の契機でもありとして肯定的にとらえようとしていた。ボリシェヴィキが無神論を放棄して、ロシア正教を受容することで時代を変容させられるとの「夢想」の先では、過酷な現実がサヴィツキーらを待ちうけていた。1930年代後半に運動が消滅すると、ユーラシア主義は共産主義と無神論のソ連ではもちろん、国外でも忘却された。

* * * * *

ユーラシア主義が再びソ連で人々の関心を集めるようになったのは1980年代後半、かつてユーラシア主義の誕生の契機となったソ連邦が解体に向かっている時期であった。ソ連邦崩壊でロシアの領土は収縮し、体制転換の混乱が続いた。新たな国家理念、ロシア人のアイデンティティーが模索されていたときに、ソビエトでもロシアでもないユーラシアという概念が受け入れられて、ユーラシア主義は、自らがかつてロシア＝ユーラシアと定義した世界で初めて市民権を得た。

しかし、ユーラシア主義は思想として体系化されたものではなく、断片的にその著作が公刊されたこともあり、復権は政治的コンテキストの中で進んだ。ユーラシア主義の本来の理念から離れて、ロシアと欧米との協調を目指す北大西洋主義へのアンチテーゼ、NATOの東方拡大や米国一極主義への抵抗、ソ連の再統合の原理としてとらえられるようになる。かつての大国ソ連への郷愁と新たなナショナリズムとも結びついた潮流は、ネオ・ユーラシア主義とも呼ばれるが、サヴィツキーらが唱導したユーラシア主義との継承性は希薄である。

近年は、ユーラシア主義者の著作や活動の検証が進み、ユーラシア主義の恣意的な読み直しが是正される一方で、「ユーラシア」というネーミングがロシアに氾濫するようになった。政治団体や各種の社会団体や基金の名称のほかにも、カフェ、レストラン、会社名、小説の題名にまで「ユーラシア」が使われている。ロシアで流行っている歴史改変小説の中には、ロシアがモンゴル、中国と合体してユーラシア帝国を築くという想定など、明らかにユーラシア主義、またネオ・ユーラシア主義に刺激された創作と推察されるものも多い。今後もユーラシア主義は、位相を変容させながらロシアの土壤に広がると思われる。

《翻訳》

ユーラシア主義ⁱ⁾

P.N.サヴィツキー

I

ユーラシア主義者は、思考と生活における新たな基盤の代表者である。また、人生を規定する根本的な諸問題にたいする新しい考え方、過去10年間で経験されたすべてから導き出される考え方に基づいて、今日まで支配的である世界観と生活機構のラジカルな改革に取り組んでいる活動家グループである。同時にユーラシア主義者は、ロシアおよび、かれらがロッシースキー¹⁾あるいは

「ユーラシア」と名づける世界全体について、新しい地理的、歴史的的理解を示す。

その名前は、「地理的」起源を持つ。というのは、従来の地理学が「ヨーロッパ」と「アジア」という二つの大陸に区別してきた旧世界の陸地の主要地帯に、第三の中間大陸である「ユーラシア」を区別するようになったからで、そのユーラシアという表記から自らの名前をつけたのである。

ユーラシア主義者の考えでは、純粋な地理的意味において、西ヨーロッパと東ヨーロッパの総体としての「ヨーロッパ」という概念は、空虚で愚かしいものである。地理的輪郭において、西には沿岸の豊かな発展、大陸から半島への先細り、島々があり、東には海岸との接点を完全に切断された一面の大陸地帯がある。地形的には、西には山、丘陵、低地の複雑な組み合わせがあり、東には周辺が山で囲まれただけの巨大な平地がある。気候的には、西は冬と夏の差が比較的小さい沿海気候だが、東はこの差が激しく、暑い夏と厳しい冬がある。その他もろもろ、西と東では異なる。はっきりと言えることは、ユーラシア主義者が「白海-カフカス」平地と呼ぶ東ヨーロッパの平地は、地理的特質においては西ヨーロッパよりも、さらに東に位置する西シベリアやトゥルケスタンの平地にはるかに似ているということだ。上記三つの平地は、お互いを隔てる高地（ウラル山脈と所謂「アラル-イルトゥイシ」分水嶺）、また東、南東、南からその三つを取り囲んでいる高地（ロシア極東、東シベリア、中央アジア、ペルシア、カフカス、小アジアの山脈）とともに特殊な世界を形成している。唯一無二であり、地理的には、その西側に位置する諸国とも、その南東および南側に位置する諸国とも異なる世界である。そして、その西側の諸国を「ヨーロッパ」という名前にし、その南東および南側の諸国を「アジア」という名前にするならば、前述の世界は、中央にあって媒介する世界として「ユーラシア」という名前に妥当するであろう。

旧世界の陸地の主要地帯に、今までのように二つではなく三つの大陸を区別する必要性は、ユー

ラシア主義者による「発見」というわけではない。これは、早くから意見表明してきた地理学者たち、特にロシア人地理学者（たとえば、V.I.ラマンスキー教授による1982年の著作²⁾）の見解にさかのぼる。ユーラシア主義者は定式を先鋭化させ、再び「見えてきた」大陸に、以前は時として旧世界の陸地の主要地帯すべて、つまり、古い「ヨーロッパ」と「アジア」の総体を指していた名前を与えたのである。

ロシアは、「ユーラシア」の陸地の主要空間を占めている。ロシアの大地が、二つの大陸の間で分裂するのではなく、むしろ、ある第三の独自の大陸を形成しているという結論は、地理的な意味を持っているだけではない。わたしたちは、「ヨーロッパ」と「アジア」という概念にいくらか文化的、歴史的な内容も与え、「ヨーロッパ」および「アジア」諸文化のある具体的な領域として考えているので、「ユーラシア」の表記は、圧縮された文化的、歴史的特徴づけの意味を持っているⁱⁱ⁾。この表記は、ロシアの文化生活に相互に比較可能な割合で様々な文化要素が入ってきたことを示している。ロシアの文化世界では、南、東、西の影響が入れ替わりながら、一貫して支配的地位を占めてきた。このプロセスにおいて、南は主にビザンチン文化の形で現れている。ビザンチン文化のロシアへの影響は、長期的で基礎を成すものであり、この影響が特に高まった時代としては、およそ10世紀から13世紀の時期を挙げることができる。東は、ここでは主に「アジア азиатских」(上述した意味での「アジア азийских」)[原注 i 参照、訳者]固有の特質の一つとして現れている。歴史上の一定期間に旧世界の広大な部分を所有し、統治してみせたモンゴル・タタール(ジンギスカンとその後継者たち)の国家体制の模範は、確かに、ロシアの偉大な国家体制の創設において多大で肯定的な役割を果たした。ステップ的な東の生活様式も、ロシアに広範な影響を与えた。この影響が特に強かったのは、13世紀から15世紀である。15世紀末からヨーロッパ文化の影響が増大し始め、18世紀になると最大に達する。常に十

分に正確とはいえないが、現実的な本質を示している区分方法で旧世界の諸文化を「ヨーロッパ」文化と「アジア азиатско-азийские」文化に分類してみると、ロシア文化は、前者にも後者にも属さないのである。それは、両者の諸要素を組み合わせて、ある種の一体性を持たせた文化である。それゆえ、上記の文化区分の見地からは、ロシア文化を「ユーラシア」文化と分類するほうが、何か他の分類よりもよく現象の本質を表していることになる。過去の文化の中で、真に「ユーラシア」文化であったのは、きわめて偉大で多面的でわれわれに知られている文化のうちの二つである。すなわち、古代ギリシアの「西」と古代の「東」の要素を合わせたヘレニズム文化、そして、古代ギリシア・ローマ後期と中世の広範な東方・地中海文化世界という意味でヘレニズム文化を継承したビザンチン文化である。(両者が繁栄した地域は、ロシアの主な歴史的中核地域より明らかに南に位置している)。ロシア文化とビザンチン文化を結びつける歴史的連関は、きわめて顕著である。第三の偉大なる「ユーラシア」文化は、ある程度は先行した二つの文化の歴史的継承から生まれたものである。

その存在の地理空間的なデータにおいては「ユーラシア」であるロシア文化圏は、歴史文化の基礎と固定化された骨組みを、ほかの「ユーラシア」文化から受け取った。その後、ロシアの土壌にアジア азиатско-азийского(東方の影響)とヨーロッパ(西方の影響)文化の諸層が連続的に付加されていったことにより、ロシア文化の「ユーラシア的」特質は強力かつ確実にになった。

ロシア文化を「ユーラシア」文化と規定することで、ユーラシア主義者は、ロシア文化の独自性を自覚する者として発言している。この点でユーラシア主義者には、純粋な地理的規定における場合よりも多くの先駆者がいる。この場合、そのような先駆者として、(哲学者・社会評論家としての)ゴーゴリとドストエフスキーを含め、スラブ主義的傾向を持つすべての思想家を含めるべきであろう。思想全般におけるユーラシア主義者は、

ロシア哲学およびロシア歴史哲学的思考の強靱な伝統の継承者である。最も近いものとして、この伝統はスラブ主義者が活動を始めた19世紀30-40年代にさかのぼるⁱⁱⁱ⁾。より広い意味では、中世ロシアの文献の中の一連の著作もこの伝統に加えるべきであり、その最も古いものは15世紀末から16世紀初めにあたる。ツァリグラード³⁾ 陥落(1453年)により、ロシア人の間に正教の擁護者、ビザンチン文化の継承者としての役割意識が先鋭化し、ある意味ではスラブ主義とユーラシア主義の先駆とみなすことのできる理念が生まれたのである。ユーラシア主義の「道の開拓者」である、ゴゴリやドストエフスキー、またかれらに近いホミャコフ、レオンチェフなど他のスラブ主義者は、その歴史的威容で今日のユーラシア主義者を圧倒している。しかし、このことは、かれらとユーラシア主義者の思考が一連の問題で一致しており、その思考のまとめ方は、ある面ではユーラシア主義者のほうが偉大な先駆者たちより正確であるという状況を否定するものではない。スラブ主義者は、ロシアの文化的、歴史的独自性を規定する基盤として「スラブ主義」に依拠したため、明らかに、擁護しにくい立場を擁護することになった。もちろん、個々のスラブ民族の間には文化的つながり、何よりも言語的つながりがある。しかし、文化的独自性の基盤としてスラブ主義の概念が与えるものは、現代までに根づくことのできた経験的内容がどうであれ、わずかでしかない。

ブルガリア人とセルビア-クロアチア-スロベニア人の文化的特質の創造的発現は、未来の話である。ポーランド人とチェコ人は、文化的意味では西「ヨーロッパ」世界に属し、そこで一つの文化圏を形成している。明らかに、ロシアの歴史的独自性は、「スラブ」世界のみには属しているということでも説明できないし、主として属しているということでも説明できない。これを感じていたスラブ主義者は、心の中ではビザンチンに向かっていった。しかし、ロシアとビザンチンのつながりの意義を強調しながらも、スラブ主義は、ロシアの文化的、歴史的伝統の性格をいくらかでも十全か

つ相応に表現したり、ロシアとビザンチンの文化的継承の「同質性」を示したりする公式を出さなかったし、出すこともできなかった。「ユーラシア主義」は、ある程度その両方を表現している。「ユーラシア主義」の公式は、ロシアの過去、現在、未来における文化的独自性を、主に「スラブ主義」の概念に頼って説明、定義することが不可能である点を考慮している。「ユーラシア主義」は、そのような独自性の源泉として、ロシア文化における「ヨーロッパ」と「アジアазиатско-азиатских」の要素の組み合わせを指摘する。この公式は、ロシア文化におけるアジア的要素の存在を確認しているため、ロシア文化と、歴史的役割において広範で創造的な「アジアазиатско-азиатские」文化世界とのつながりを明らかにしている。そして、そのつながりをロシア文化の強力な側面の一つとして示し、その意味では同じく「ユーラシア」文化を有していたビザンチンとロシアを対比させている^{iv)}。

以上が、ロシアの文化的、歴史的独自性を自覚する「ユーラシア主義者」の立場のごく簡略な定義である。しかし、ユーラシア主義者の学説の内容は、このような自覚に限られるものではない。ユーラシア主義者は、文化に対するある全般的理念によってこの自覚を固め、今日起こっていることを解釈するためにその理念から具体的な結論を導き出した。まず、われわれは上記の理念を説明し、そのあとで現代にかかわる結論に進むことにしよう。両方の分野においてユーラシア主義者は自らを、前述のロシア思想家(スラブ主義者とかれらに近い人々)のイデオロギー上の継承者と感じている。

ドイツで唱えられた見解(シュペングラー⁴⁾)にもかかわらず、またそれらの見解が現れるのとはほぼ同時に、ユーラシア主義者が最新の「ヨーロッパ」(つまり、通常用語では西ヨーロッパ)文化の「絶対性」を否定するテーゼを発表したにもかかわらず、ヨーロッパ文化の特質とは、今日まで連綿と続く世界の文化的進歩のプロセスの「完遂」にあった。(まさにかかる「絶対性」と

「ヨーロッパ」文化のかかる特質にたいする確信は、ごく最近まで「ヨーロッパ人」の脳裏に強固に保たれていたし、部分的には今も保たれている。この確信は、ロシア・インテリゲンチヤの大半を含む「ヨーロッパ化された」諸民族の社会の上層部で盲目的に受け入れられてきた。この確信に対してユーラシア主義者は、多くの点での相対性、特にイデオロギーおよびモラルの成果や「ヨーロッパ的」認識様式の相対性を認めるよう反論したのである。ヨーロッパ人が「野蛮で」「遅れている」と呼ぶものは常に、何か客観的な基準によってヨーロッパの発展より下位にあると認められるようなものではなく、単に「ヨーロッパ人」の見方ややり方に似ていないものに過ぎないとユーラシア主義者は指摘した。いくらかの分野においては最新の科学技術が、世界史全般を通して存在しているその種のあらゆる成果を凌駕していると客観的に証明できるとしても、イデオロギーとモラルの問題については、このような立証は本質的に不可能である。「ユーラシア主義」の理念によれば、イデオロギーとモラルの範疇では唯一の評価基準となる内的モラルの感覚と哲学的信条の自由に照らしてみると、西ヨーロッパの多くの最新のものは、任意の「古代の」あるいは「野蛮で」「遅れた」諸民族の相応する成果に比べて、上位にないばかりか、逆に下位にあるように見えるし、また実際そうなのだ^{v)}。ユーラシア主義の理念は、文化的、歴史的「ヨーロッパ中心主義」からの断固たる決別を示す。この決別は、何らかの感情的懊悩の体験からではなく、一定の科学的かつ哲学的前提から導き出されたものだ。その前提の一つは、最新の「ヨーロッパ的」考え方に君臨する普遍主義的な文化理解の否定にある。この普遍主義的理解のせいでヨーロッパ人は、ある民族は「文化的」、ほかの民族は「非文化的」というふうにいよいよ加減な分類をしている。世界の文化的進歩においてわれわれが遭遇する「文化圏」あるいは「文化」のうち、あるものはより多くを達成し、ほかのものは少ないことを認めねばならないだろう。しかし、それぞれの文化圏が何を達成したか

を正確に定義するには、文化を分野ごとに細かく解体して検討するしかない。ある分野では下位にある文化圏が、別の分野では高位になることもあるし、また実際に頻繁にそうになっている。太平洋にあるイースター島の古代住民が、経験的知識や技術のきわめて多くの分野で現代イギリス人よりも「遅れている」ことになんら疑いの余地はない。しかし、そのことはイースター島の古代住民が自分たちの彫像に、現代イギリスの彫刻が到達できぬほどの独自性と創造性を発揮することを妨げなかった。16-17世紀のモスクワ・ルーシは、多くの分野で西ヨーロッパに「遅れて」いた。しかし、このことは、モスクワ・ルーシが芸術的建設の「自発的」時代を築き、芸術的建設においては、当時のモスクワ・ルーシが大半の西欧諸国より優位にあったと納得させるような塔と模様のある教会の奇抜で目を引くタイプを作ることを妨げることはなかった。これと同じことが、同一の「文化圏」の個々の「時代」について言える。16-17世紀のモスクワ・ルーシは、前述のとおり芸術的建設の「自発的」時代を生み出したが、聖像画については、14-15世紀のノブゴロドやスーズダリの成果に比べて明らかな低迷を示している。われわれは、見てわかりやすい造形芸術の分野から例を引いてきた。しかし、もしわれわれが同様に外的自然の認識という分野で、例えば、「理論的知識」と「実際のものの見方」という領域を区別するようになると、「理論的知識」では成功を収めている現代ヨーロッパの「文化圏」は、他の多くの文化に比べて「実際のものの見方」で低迷していることがわかるだろう。「野蛮人」や無知な農民は、高度な専門家である現代の「自然科学者」よりも、より繊細かつ正確に一連の自然現象を理解している。このような例は枚挙にいとまがない。さらに言うならば、文化の諸事実の総体は、文化を領域ごとに分解して検討することでしか文化の進化と特質のいくらかでも全般的な認識に近づくことはできないということを見事に示す例となっている。かかる検討においては、三つの基本的な概念が問題となる。つまり、「文化圏」、その存続

する「時代」、そして文化の「領域」である。あらゆる検討は、ある「文化圏」とある「時代」に特定される。どのように時代の境界線を引くかは、研究の視点と目的によって決まる。「文化」を「諸領域」に分割してゆく特徴と度合いも、同様に決まる。細分化されない総体としての文化の無批判な検討を避けるためには、分割の原則的必要性を強調しておくことが大切だ。文化を細分化して検討すると、大雑把に「文化的」、「非文化的」と言える民族はいないことがわかる。そして、「ヨーロッパ人」が「野蛮人」と呼んでいる多種多様な諸民族は、その技能、習慣、知識において、ある領域とある視点からは「高位に」ある「文化」を有しているのである。

II

ユーラシア主義者は、普遍的「進歩」を否定する思想家たちに与する。ところで、これは前述した「文化」の概念によって明確になる。進化の線が様々な領域で様々な延びるのならば、全般に共通する上昇運動というものはいないし、ない。また、全般に共通する間断ない段階的向上というものもない。あれこれの文化圏やその集まりは、ある視点からのある点では向上しながら、別の視点からの別の点では低迷しているということも間々ある。この状況は、とりわけ「ヨーロッパ」文化圏にあてはまる。ユーラシア主義者の視点からは、「ヨーロッパ」文化圏は、科学・技術の「向上」を思想的な、何よりも宗教的な衰退と引き換えに手に入れた。その成果の二面性は、経済への関わり方に顕著に現れている。旧世界の何世紀にもわたる長い歴史においては、一方では思想・倫理・宗教的基盤と他方では経済的基盤との間に何らかの一体的な関係が存在していた。正確に言うなら、後者の前者に対する思想的従属が存在した。経済問題に対するあらゆるアプローチに宗教・倫理的契機が浸透していたからこそ、経済学説を唱える歴史家たちの一部（例えば、古くは19世紀半ばのドイツ・ハンガリーの歴史家カウツで、彼の業績は今日なおいくらかの意義を失って

いない)は、経済の諸問題を扱う際に、中国の文書の断片、イランの律法「ベンディダダ」、モーセの律法、プラトン、クセノフォン、アリストテレス、中世の西洋の神学者の著作など膨大で多様な文献を一つのグループにまとめることができたのである。これらすべての作品の経済哲学は、ある意味で「従属経済」哲学だ。それらすべての作品において何か必要かつ義務的なものとして強調されるのは、われわれの経済的欲求を満足させることと倫理的、宗教的原理との結びつきである。ヨーロッパ「新時代」の経済哲学は、この見方とは対極的だ。常に直接的な言葉を使うわけではないが、しばしば世界観の基礎をもって新ヨーロッパ経済哲学は、経済現象界は自足的でそれ自体に価値があり、人間存在の目的を内包し尽くしていると主張する。新たな政治経済が実現させ、蓄積した経済現象の理解や見方における純粋な認識的達成や成果の偉大さを否定するのは、精神的盲目の証左であろう。しかし、経験科学として振る舞い、実際にかかなりの程度そのとおりであった新政治経済は、その置かれていた状況全般では形而上学として社会意識と時代に登場したのである。古代の立法者、哲学者、神学者の経済理念が一定の形而上学の理解と結びついていたのと同様に、現代の経済学者の経済理念もそこに結びついている。しかし、前者の形而上学が「従属経済」哲学であったならば、後者の形而上学は「戦闘的経済主義」⁵⁾ 哲学である。これはある意味で思想的代価であり、これを支払って新ヨーロッパは近代、特に過去100年間に経験した数量的に巨大な経済成長を手にした。中世の終わりから近代にかけて、倫理的遺訓である古代の英知、利己的な人間の本能を説諭と摘発の言説によって抑制する元来の英知である「従属経済」哲学が、「戦闘的経済主義」の思い上がった理論と実践を主張する新時代の新理念にいかにか押しつぶされていったかという構図の中には、ある種教訓的なものがある^{vi)}。

史的唯物論は、「戦闘的経済主義の」最も完成された鋭い表現である。経験に基づくイデオロギーの現実においては、宗教の問題に対する一定の

態度において、一方では「従属経済」哲学と、他方では「戦闘的経済主義」との関係が見受けられるのは偶然ではない。「従属経済」哲学は、常にいずれかの有神論の世界観の付属物であったし、また今もそうであるとするなら、史的唯物論は思想的に無神論とつながっている。

史的唯物論の中に隠れていた無神論の本質は、今日、おとぎ話の狼のように、人目をそらすためにある時期まで覆っていた経験科学という羊の皮を脱ぎ捨てた。無神論の世界観はロシアで歴史的勝利を収めつつある。国家権力は無心論者たちの手中にあり、無神論を宣伝する武器となった。ユーラシア主義者は、ロシアで起きたことに対する「歴史的責任」問題の検討に深入りすることはないし、誰からもその責任を取り除くつもりもないが、これと同時に理解していることは、ロシアがその精神生活の鋭敏と興奮のせいで受け入れ、徹底して生活に持ち込んだ本質は、その発祥と精神的起源においてロシア的本質ではなかったということだ。共産主義の狂乱は、200年を超える「ヨーロッパ化」時代の完遂としてロシアに到来した。ロシアで国家的に支配している共産主義の精神的本質が、特殊な形で反映されたヨーロッパ「新時代」のイデオロギーの本質であると認めること、これは高度に経験論的裏づけのある立証である。(ここで考慮すべきことは、ロシア無神論の起源がヨーロッパ「啓蒙」理念にあること、ロシアの社会主義思想が西側から持ち込まれたこと、ロシア共産主義の「方法論」とフランス・サンジカリストの理念との関係、共産主義ロシアにおけるマルクスの意義と「崇拜」である)。しかし、論理的完結に到達した形でヨーロッパ「新時代」のイデオロギーの本質を見たロシア人は、共産主義を受け入れず、同時に徹底的に思考する能力を失わず、最新の「ヨーロッパ」イデオロギーの基本に戻ることはできない。

共産主義革命の経験からは、ユーラシア主義者の意識にとって同時に古くも新しくもある何がしかの真実が導き出される。それは、健全な社会生活は、人間と神、宗教との分かち難い絆の上の

み築くことができるということだ。非宗教的な社会生活、非宗教的な国家体制は、拒否されるべきである。ただし、この拒否は、具体的な立憲・法制形態に関してあらかじめ何も定めはしない。ユーラシア主義者の考えでは、その一形態として例えば、「国家から教会の分離」⁶⁾も所与の条件のもとで問題なく実現することができる。しかし、やはり本質的にきわめて重要なことは、世界史上おそらく初めて徹底した無神論を貫いて無神論を公式宗教に転化させた共産主義政権の統治が、19世紀後半の深遠なロシア人哲学者レオンチェフの予言的言葉によると「組織された苦悩」になってしまったこと、「万人の幸せ」(そのために共産主義政権は確立したらしいが)を震撼させ破壊するシステムになってしまったこと、未曾有の恐ろしくも冒瀆的で残忍な現実描写の中では、あらゆる形象が色あせ、あらゆる言葉が力を失うような、人間人格に対する侮辱のシステムになってしまったことである。繰り返すが、初めての徹底した無神論政権の君臨が、けだもののような連中の君臨になった状況は偶然ではない。史的唯物論とそれを補完する無神論は、拘束を解き、原初の動物的な(特に、略奪に至るような原初の経済的な)人間本能の抑制を失わせる。唯物論と無神論の理念的支配という条件の下で、社会生活を規定する基本的な力となるのは憎悪であり、それにふさわしい果実「万人の苦しみ」をもたらすだろう。そして、遅かれ早かれ最後の果実「迫害者の苦しみ」ももたらさぬわけにはいかぬだろう。

ロシアは、史的唯物論と無神論の勝利を実現させた。しかし、ロシア革命の過程で現れた法則性は、決してロシアだけに関係しているのではない。原初的な経済的欲求やあらゆる動物的原初性に対する崇拜は、豊かな芽生えとなってロシア以外の諸国民の意識のなかにも育った。ロシアの外でもこのような崇拜は、長期的で平穏な社会生活の基盤にはなりえない。このような状況のもとに蓄積された破壊的な力は、遅かれ早かれそこでも社会創生の力を打ち負かさずだろう。問題は、その深さと広さを十分に示して提起されるべきだ。唯物論

的、無神論的見解の圧力に対しては、高貴で重みのある内容に満ちた理念の本質を対置させねばならない。ここで動揺があってはいけない。かつてない率直さと不屈の決断力をもって、きわめて広範な戦線とありとあらゆるところで、ごく僅かであれ唯物論と無神論に関係しているあらゆるものとの闘いを開始し、持続せねばならない。悪はその根元まで突き止めるべきであり、文字通りの意味で根絶すべきである。史的唯物論と無神論のきわめて激しい発現や共産主義だけを相手に闘ってみても、表層的で頼りない試みになるだろう。問題は、より本質的に、より深く提起される。どこでどのように現れようとも「戦闘的経済主義」に宣戦布告すべきなのだ。宗教的世界観のために全力を尽くさねばならない。熱い感性と明快な思想と完璧な解釈をもって、新ヨーロッパの特殊な精神と闘うのである。その精神は、歴史的、イデオロギー的限界に達して今日に至っているため、未来のある時期に次のどちらかが起こると、かなりの確実性で主張できるだろう。一つは、苦痛に満ちて悲劇的な変動の中で新ヨーロッパの文化圏が死滅し、煙のように散ってしまう。もう一つは、西欧で中世から始まった、サン・シモン主義者たちの用語では「批判の」時代が終焉して、「有機的な」時代、「信仰の時代」にとって代わられる。古代の英知を咎めも受けずに度を越えて踏みこみじってはならない、なぜならそこには真実があるからだ。「戦闘的経済主義」哲学の中に示されているように、原始的で利己的な人間の本能を最高原則にするのではなく、澄んだ宗教的感情によってそのような本能を抑制し、阻止することによって高度に実現可能な地上における「万人の幸せ」の手段を手に入れることができるのだ。地上の幸福にたいする絶対的な関心に屈する社会は、遅かれ早かれ地上の幸福を失うだろう。これが、ロシア革命の経験から見えてくる恐ろしい教訓である。

ユーラシア主義者は、この経験を最後までそして完全に解明して認識し、そこから導き出されるすべての教訓を得ようと努めている。また、狼狽と臆病のせいで共産主義の残忍な姿から離れてい

ったが、共産主義の基礎あるいは根幹を成すものを捨てられずにいる者たちと違って、この問題においては勇敢であろうと努めている。鋤を手に取りながら後ろを見る者がいるだろうか、新しい葡萄酒を古い皮袋に注ぐ者がいるだろうか、忌まわしい共産主義の新たな真実を目にしながらか、たとえどんな形を装っていようと「戦闘的経済主義」の古い卑劣を拒絶できない者がいるだろうか。

個人の信仰では不十分だ。信仰ある人々が結集しなければならない。

ユーラシア主義者は、正教を信仰する人々である。そして正教会は、かれらの心を照らす灯明である。ユーラシア主義者は、正教会へと、その聖体とその恩寵へと同胞たちを誘う。ユーラシア主義者は、無神論者と神に刃向かう者たちの教唆によってロシア正教会の奥底に起こった恐ろしい混乱に困惑することはない。精神力は十分であり、闘いは明澄へ進むと信じている。

正教会は、高度な自由の実現である。正教会から分かれたローマ教会において支配的な権力基盤と違って、正教会の基盤は和合にある。ユーラシア主義者の見立てでは、容赦ない世俗の事業においては容赦ない権力が避けられぬが、宗教的な教会の事業においては天恵の自由と和合のみが良き指導者である。「ヨーロッパ」の一部では、世俗の事業における権力の有効性を破壊し、教会の事業に暴虐の権力を持ち込んでいる。

正教会は何世紀にもわたって、正教会に対して誠実であり続けた諸民族のみを明るく照らしてきた。教理の真理と苦行者の献身によって明るく照らしてきたのである。今や違った時代が訪れているのかもしれない。現代の正教会は、古代東方教会を継承しており、そこから生活の基本原則として受け取ったものは、経済面での生活形態（例えば、貸付利子の徴収に反対して何世紀も闘っている西方教会のやり方とはまったく異なる^{vii)}）や人類の思想的達成に対して何ら偏見を持たないということである。だからこそ、新たな宗教的時代の枠組みの中でまさに正教会の使命として高度に期待されているのは、最新の産業技術と科学の成

果を保護し、「戦闘的経済主義」、唯物論、無神論のイデオロギー的「上部構造」からその成果を守ることかもしれない。かつて、コンスタンティヌス、二人のテオドシウス、ユスティニアヌス⁷⁾の時代に古代東方教会が、真に精神的高揚のあった「信仰の時代」の枠組みの中で、きわめて複雑で発達した経済生活と神学・哲学的思考のかなりの自由を守ることができたのと同じように。現代の産業技術と経験科学は、その発展がどんなものであれ、新しい「信仰の時代」の内部でその存在と繁栄の可能性を否定するようなものは持ち合わせていない。現代の科学技術と「戦闘的経済主義」および「無神論」のイデオロギーとの結合は、決して必然でもなければ避けられぬことでもない。

宗教的観点からの産業技術とは、その可能性の限界がどこにあるにせよ、神が人類を創造した際の約束、「海の魚、空の鳥、家畜、地上のすべてを支配せよ」⁸⁾を実現する手段である。宗教的観点からの経験科学とは、神の世界の状況を解明することであり、知識の成果があがるにつれて、ますます完全で満たされていることがわかり、創造主の英知をいっそう明らかにすることになる。

Ⅲ

ユーラシア主義は、歴史哲学あるいはその他の理論的教説の体系であるだけではない。ユーラシア主義は、思考と行動を結合させて、可能な限り論理的見解の体系とともに行動の一定の方法論を確立することを目指す。ここでユーラシア主義者が直面する重要な課題とは、宗教的な見解を、経験論に基づく強力な実用性を有する生活や世界に結合させるという問題である。この問題提起は、ユーラシア主義のあらゆる特徴によって裏づけられる。ユーラシア主義者は、宗教的基盤の擁護者であると同時に徹底した経験論者だ。そのイデオロギーは諸事実から生まれる。ロシア世界を「ユーラシア」世界と特徴づけることによって、ユーラシア主義者は、故郷の大地のあらゆる空間に、その世界のあらゆる歴史の断片に全身で寄り添っているかのようだ。しかし、諸事実を理解するだ

けでは不十分であり、歴史の柔軟なプロセスにおいてそれら諸事実を操作する必要がある。信仰を持って世界を体験する人々は、この課題に行き着くので、むき出しで一目瞭然であると同時に神秘的で震撼させるような現実そのものとしての悪の問題に突き当たることになる。ユーラシア主義者は、世界における、つまり、自分や他人、個人生活や社会生活における悪の現実を極限まで感じている。ユーラシア主義者は、ユートピア主義者とはまったく違う。罪深い傷を負いやすく、そのせいで導かれる人間本性の経験的な不完全さを知っているユーラシア主義者は、決して人間本性の「善良さ」を前提として計画を立てたりしない。したがって「俗世での」行動課題は、悲劇的な課題となる。なぜならば、「世界は悪の中に横たわっている」からだ。この課題の悲劇性は避けられない。そして、ただひとつユーラシア主義者が目指しているのは、自らの思考と行動の様式においてこの悲劇性の頂点に身を置くことである。われわれが言いたいのは、堅固な哲学的確信であれ、ユーラシア主義者も含まれるロシアの歴史的、民族的特徴の本質であれ、この課題に感傷的に関わる可能性を排除しているということだ。世界の罪深さを意識すると、感傷的な関わり方が排除されるだけでなく、経験的決断における勇敢さが要求されるようになる。いかなる目的も手段を正当化しない。罪はいつまでも罪のままである。しかし、「俗世で」行動しながら罪を恐れてはならない。罪の重荷を自ら背負わねばならぬときもある、なぜなら、無為の「神聖」はさらに大きな罪になるからだ。

実務的な分野ではユーラシア主義者にとって、「右翼」と「左翼」という政治的、社会的解決の問題そのものが解消されている。最終的な目的において人間存在の限られた現実だけにしがみつく人にとってさえも、また、政治的および経済的応用性の知識と事実に没頭している人にとっても、この分け方は強烈な意味を持つ。この問題にかかる態度をとる人たちにとっては、所属が「左翼」であるか「右翼」であるかという具体的な政治的

および社会的解決を除いてはいかなる価値も存在しない。このような人は、このような解決をゆるぎなく「無我夢中で」支持するはずだ、なぜなら、このような解決の他にはその人にとっていかなる価値も存在しないし、宗教上の権威としてのその人自身から何も残らなくなるからだ。こうして選んだ政治的、経済的方針が人生の要求に合わず、実用的でないことがわかったとしても、首尾一貫した人間はやはりその方針にしがみつくと、なぜなら、その方針はすでにその人そのものだからだ。実務的な解決に対するユーラシア主義者の態度はこれとは違う。ユーラシア主義者にとって本質的なものは、政治的、経済的な経験的知識の領域外にある宗教的な支えである。政治的、経済的領域でも宗教的価値は許容されるので、個々のケースでは、「右」の解決も「左」の解決も良いものになりうるし、また同様に「右」も「左」も悪いものになるかもしれない。宗教的見地からは、応用的な解決の大半に差異はない。政治的、経済的応用の重要性を十分に理解すると同時に、そこに最高の価値を置くことのないユーラシア主義者は、宗教的には差異のないすべての領域に対して偏見を持たずに自由に関わるが、これは他の世界観を持つ人にはできないことである。実務的な解決においては、いかなる偏見にも囚われることなく、生活の要求がユーラシア主義者にとっての指導的原理となる。だからこそ、ある解決においてユーラシア主義者はもっとも過激な人たち以上に過激になりうるし、別の解決においてはもっとも保守的な人たち以上に保守的になるのである。ユーラシア主義者には歴史感覚が有機的に備わっており、歴史的伝統を継承しようとする感情は、その世界観に固有のものである。しかし、その感情がお定まりの型にはまり込むことはない。いかなる型もユーラシア主義者を拘束することはない。現象の歴史的本性を完全に理解するなかで、事物の本質のみがあらゆる問題の深淵からユーラシア主義者を覚醒させるのである。

今日のロシアの現実、ほかのどのような現実にもまして「本質的」な考え方を要求する。革命

の精神的原理に対するユーラシア主義者の考え方は、前述のとおりである。しかし、革命の物質的・経験的相貌において、革命によって築かれた個々のグループからなる政治勢力の考え方において、新たな財産分配において、革命のかなりの部分は、取り除くことのできない「地質的」な事実としてみなされなければならない。このような認識は、現実の感覚と初歩的な国家的感性によって否応なくもたらされる。ユーラシア主義者は、「非革命」精神で活動しているすべてのグループの中でも、もっともラジカルで包括的な事実承認へと進むかもしれない。ここで問題になる政治的影響や財産分配の諸事実は、ユーラシア主義者にとって第一義的で原理的な意味を持たず、二義的な価値しかない。そのためユーラシア主義者にとって事実承認という課題は、いくらか容易なものになっている。しかし、多くの場合、事実は卑劣と犯罪から生まれており、ここに問題の難しさがある。しかし、卑劣と犯罪が神の意志によって客観的な歴史的事実に変容させられたのなら、この事実を容認することは神の意思と矛盾しないと考えるべきだ。革命からの出口を見つけ出すという、時代の経験論的必要性においては、ある程度はっきりした事実容認がある。宗教的な見地からは、この事実容認の必要性は、負けることなく通過せねばならない誘惑に例えられるだろう。神のものを返したり、傷つけたりすることなく、カエサルのはカエサルに返しなさい⁹⁾ (つまり、あらゆる経験論的、政治・経済的な時代の要求を考慮するということ)。ユーラシア主義者の観点から問題となっているのは、卑劣と犯罪を新たな信仰の時代によって贖い、変容させることであり、その新たな時代は、罪深く、暗く、恐ろしいものをして光を放つものへと鋳直してくれるはずだ。これが可能になるのは、機械的に、「マルクス主義的に」あらゆる「悪しきもの」を「良きもの」に変える、歴史の弁証法的発露によってではない。それが可能になるのは、道徳の力の内的な蓄積のプロセスにおいてであり、その力にとっては、事実容認の必要ですら圧倒的な誘惑になることはない。

原注

- i) 本稿は、ユーラシア主義の海外の友人からの依頼で書かれたユーラシア主義の概要紹介である。本稿をこの『ユーラシア報』に掲載したことで、本書とユーラシア主義者の先行刊行物との関係が確立される。
- ii) 「アジア」という名詞から、いくつかのロマン・ゲルマン語族と同様にロシア語にも二つの形容詞「アジアスキイ (азийский)」と「アジアツキイ (азиатский)」が派生した。歴史的意味において前者は主に、ローマ帝国の属州であった現在の小アジア西部を、その後は主教区を指すようになった。そこから旧世界の主な大陸は後にアジアという名称を受け継ぐ。初期の狭義での「アジア (Асия)」、 「アシイスキイ (асийский)」、 「アジア人 (асийцы)」という用語は、例えば「使徒言行録」(第19章と第20章)に使われている。形容詞「アジアツキイ」は、大陸全体に関係している。「ユーラシア」、「エヴラジイスキイ (евразийский)」[ユーラシアの形容詞：訳者]、「ユーラシア人 (евразийцы)」の語根となっているのは、前者の、より古い意味の方だ。しかし、この場合「アジア主義 (азийство)」がローマ帝国の属州と主教区だけにそびえて立っているからではなく、逆に、この場合のユーラシア人が、はるかに広範な歴史的、地理的世界に関わっているからだ。しかし、「アジアツキイ」という言葉は、一連の誤解のせいでヨーロッパ人にとっては大雑把で不快きわまるニュアンスを持つようになった。「ユーラシア主義」の意味にも実現されているように、より古代の名称に向かうことによって、無知を曝け出すだけのこの不快な刻印を取り去ることが可能になる。この意味では、小アジアだけでなく「大」アジアの文化圏も「アジアスキイ」と名づけられる。ユーラシア主義者は特に、12使徒の時代とそれに続く世紀(ヘレニズムおよびビザンチン文化)の「アジア」に根づいた文化を高く評価し、まさにそこに、いくつかの分野においての現代の精神的、文化的創造の模範を見出そうとしている。これについては下記を参照のこと。
- iii) 主な歴史哲学の概念との関連という点では、「ユーラシア主義」はもちろん、スラブ主義者と共通の領域に位置する。しかし、両者の潮流の相互関係の問題を、単なる継承と総括することはできない。ユーラシア主義の前に開かれた展望の前提となっているのは、一つには、起きてしまったカタストロフの規模であり、もう一つには、まったく新しい文化・歴史的、社会的諸事実の出現と現象形態である。当然ながらこれらは、スラブ主義の世界観の構築には加わっていなかった。さらには、スラブ主義者が基本原理として疑う余地がないと考えた多くのことは、その後数十年で、部分的には過去のものとなるか、

根本的に成り立たぬことが明らかになった。ある意味でスラブ主義は、地方の私的な潮流でしかなかった。きわめて大きな歴史的意義を持つ、新たなヨーロッパ・アジア(ユーラシア)文化の中心になる現実的な可能性が、ロシアの前に開けている現在、統一の取れた創造的で保守的な世界観(ユーラシア主義は自らをそう見なしている)の企図と実現は、今までになかったような然るべきモデルと規模を自らのために探し出さねばならない。

- iv) 最後の定義は、かなり歴史的な厳密さを要求するかもしれない。ビザンチン文化の本質は、多種多様な要素の結合によってできあがっている。東方のパレスチナ、シリア、アルメニア、ペルシア、小アジア、またアフリカのいくつかの地域から入ってきた、宗教、芸術、そのほかの刺激の流れが、ここで西方の国家および法の伝統の受容(ビザンチンにおけるローマ法の存在と発展)と結びついたのである。ロシア文化を決定的に特徴づけているステップの諸文化との接触も、当時のビザンチンに形跡を残さずにはおかなかった。そして、ビザンチンの流行や習俗の多くは、遡ってみると、帝国の境界に次々と押し寄せてくるステップの「野蛮人」から借用したものであった。
- v) この状況は、芸術の分野、特にいくつかの造形美術の分野(建築芸術、彫刻、絵画)にあてはまる。ここでは最新の「ヨーロッパ」の成果の不完全さが、より古い時代にほかの民族によって達成されたものと比べて、ことさら顕著である。
- vi) 「戦闘的経済主義」は、本能的で無統制の人類の生活原理として、当然、どこにでもいつでも存在したし、存在している。重要なことは、新ヨーロッパではこの原則がイデオロギーの原理の中に持ち込まれたことである。
- vii) 東方教会は、325年のニケーア公会議で、貸付利子禁止の公布計画を拒否することによって、経済生活への権力の介入が教会には相応しくないと認めたのである。東方教会は、その後の時代も一貫してこの立場をとったし、今日もその立場をとっている。西方教会の実践は異なっていた。そこでは貸付利子の徴収禁止が千年にわたって維持され、18世紀のトゥルゴ¹⁰⁾は、その利子のために生活の実態をもって清算させられたのである。

訳注

- 1) エトノスとしてのロシア人(русские)に対して、ロシア正教に改宗してロシア皇帝の臣下に入った異民族はロシヤネ(россияне)と呼ばれ、ロシア人と同等の権利を与えられた。ロッシイスキイ(российский)はロシヤネに対応する形容詞にあたり、ここでは、エトノスとしてのロシア人だけでなく、ロシア帝国臣民になった多民族が

- 住む世界を表している。
- 2) V.I.ラマンスキー (Ламанский Владимир Иванович, 1833-1914) 歴史学・地理学者、スラブ主義、汎スラブ主義の立場から著作を発表した。
 - 3) 古代ロシアにおけるコンスタンチノーポリの別称、帝都を意味する。
 - 4) O.シュペングラー (Spengler Oswald, 1880-1936) 歴史哲学者、大きな反響を呼んだ『西洋の没落』(1918-22) は、ヨーロッパ文明の衰退を予兆する点でユーラシア主義者にも影響を与えたはずである。
 - 5) 反宗教政策を進めるボリシェヴィキ政権下では、1920年代になると「戦闘的無神論」と呼ばれる運動が展開され、教会の破壊や聖職者の弾圧が強まった。サヴィツキーは、この過激な運動の名称の連想から、経済効率のためにすべてを犠牲にするヨーロッパの理念として「戦闘的経済主義」を使っている。
 - 6) 1918年にソビエト政府は、「国家から教会の、教会から学校の分離について」の布告を出して、宗教を否定する政策を明確に打ち出した。
 - 7) コンスタンティヌス一世 (Constantinus, 274頃-337) : ローマ皇帝。ニケーア公会議 (325年) を開いて正教教理を定め、コンスタンチノーポリを建設して帝都とした (330年)。テオドシウス一世 (Theodosius, 346-95) : ローマ皇帝。ローマ帝国を二分して二子に譲ったために東西ローマが分離した。テオドシウス二世 (401-50) : 東ローマ皇帝。『テオドシウス法典』を編纂させた。ユスティニアヌス一世 (485-565) : 東ローマ皇帝。『ローマ法大全』を編纂させた。
 - 8) 旧約聖書、創世記1章26節：「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう。」
 - 9) 新約聖書、マタイによる福音書22章21節：「では、皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい。」(皇帝に税金を納めるのは律法にかなっているかとの問いに対するイエスの答え)。
 - 10) トゥルゴ (Turgot, 1727-81) : フランスの財政監査長官としてギルドの廃止などの改革を行うが失敗に終わった。

(2007年2月2日受理)